

語彙力と表現力を高める対話的活動

上川寛子

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: hi_kamikawa@tottori-u.ac.jp

Hiroko KAMIKAWA (Tottori University Junior High School) : Interactive activity that enhances vocabulary and verbal expressions.

要旨 — 国語の学習においては自由記述など非定型の解を考えさせる学習課題は多い。その際課題となるのは、思考が言葉によって制限されることである。語彙が少なければそれだけ思考の幅や表現する内容が制限されるのである。そこで、言葉を広げ、新たな見方、考え方を獲得するため、グループ活動により個々が持っている体験や情報を交流させる実践を行った。対話的活動を行うことで、他者の意見を取り入れ個々が持っている語彙の範囲を広げた読み取りを行うことができた。

キーワード — 対話的活動, 語彙, 言葉を広げる

Abstract — In the classes of Japanese language, there are many learning tasks that let students think over non-typical solutions such as free descriptions. The challenge of such tasks is that the breadth of the thoughts is limited by vocabulary and the range of the verbal expressions of the students. The paucity of vocabulary limits the range of thinking and the content expressed. To expand students' verbal expressions and acquire new perspectives and thinking manner, we practiced classes where students exchange their experiences and information they have through group activities. Through the interactive activities, students were able to enhance their vocabularies and verbal expressions, acquiring the opinions of others.

Key words — Interactive activity, vocabulary, expand words

1. はじめに

私たちは言葉を使って思考し、言葉を使って自分を表現する。言葉が豊かであればあるほど、自由に思考することができる。逆に言えば、言葉の範囲でしか人は思考することができないということである。生徒の感想や日常の会話の中で「すごい」という言葉がよく使われる。便利ではあるが、内容は伝わりにくい言葉である。文章の読解においても、文章中の言葉を用いた説明はできても自分の言葉で説明するとなると途端に言葉に詰まってしまうことがある。理解はできても表現となると別の問題なのである。自分の考えや作品について、自由に表現できる言葉を増やすことで思考は豊かになっていくのではないだろうか。また、言葉の字義的な意味を知るだけではなく言葉を広い意味で捉えることも語彙力である。言葉を増やすことはもちろん、言葉を自分のものとして用いることができるよう、語彙指導を強化することが必要である。

2. 研究の目的

国語科では、話し合いをする際に3人でのグループ活動を取り入れている。3人にする事で意見が出しやすくなったり1人1人の意見がより重要になったりする。全員の意見を生かすためには3人が適当だと考えている。対話は、異質な他者と関わることで、新しい発見や創造的な学びをより生み出しやすくする(阿部 2016)。同じ表現について考えたとしても、経験や知識の異なった者同士では、その表現の捉え方は違ってくる。異質な他者が意見を交流することで、自分にはなかった見方を得ることができるということである。また、相互に提供された知識を関連づけることで、新たな知識の枠組みが創出されるのも教室における協同過程の意義である(藤村 2018)。対話を取り入れることで、文章中の表現が持つ意味をふくらませ、読み取ったものを自分のものとして表現に取り入れることができるので

はないかと考え、本実践を行うこととした。

3. 授業の実際

3.1. 単元設定の理由

中学校学習指導要領の第2学年「C読むこと」の目標には、「目的や意図に応じ、文章の内容や表現の仕方に注意して読む能力、広い範囲から情報を集め効果的に活用する能力を身につけさせるとともに、読書を生活に役立てようとする態度を育てる。」とある。解説によると「文章の内容や表現の仕方に注意して読む能力」とは、文章の内容や表現の仕方について、自分の考えをもちながら読む能力のことである。短歌は、三十一文字という短い言葉で思いを伝えるため、さまざまな表現の工夫を凝らしたり、言葉を選んだりしながら作られている。俵万智は、本教材でも扱われている『短歌をよむ』（1993）という本の中で、「歌を作る場合は、言いたいことを何かに託したり、なぜそうなのかを描写によって表したり、することが多い」と述べている。また、本単元の教材『短歌』においては、「サラダ記念日」が作られたいきさつについて触れ、あふれる思いを適切に表現するために時間をかけて言葉を探す歌人の姿勢を示している。ここから、短歌の言葉の1つ1つが吟味されて用いられているものであることが捉えられる。1つ1つの表現に着目し、言葉が持つ意味を考えることで、短歌の世界を深く読み取ることができる。短歌は、鑑賞の観点を持つことで、さまざまな表現技法や用いられている言葉に着目した読みを深めていくことのできる教材であると考えられる。

3.2. 単元で提案するやりくりのたとえ

国語では、非定型の解を考えさせる問いが多い。しかし、自分なりに意見を考えればそれで良いという訳ではなく、求められる解は言葉を根拠にした説得力を持った解でなければならない。短歌の授業では、作品の背景や情景、作者の思いを考え、鑑賞文にまとめる活動がよく行われる。しかし、鑑賞は生徒の自由な読みに任せられる部分もあり、生徒個々の語彙や読みの力による部分が大きい。そこで、今回の学習では、「短歌のよさ」について考えさせることで、より客観的に短歌の表現が持つ意味や効果に着目し、作品の価値を語らせるようにした。その際、個々の活動

ではなく意見が練り合えるグループでの活動を中心に行うこととした。授業ではペア活動や班活動を普段から取り入れており、生徒は自分の意見を伝えることに比較的抵抗なく学習に取り組んでいる。教えられることよりも、自分たちで課題について検討し発見することを楽しんでいる生徒も多く、言葉の細かい部分にこだわって考える姿も見られる。他者の意見を聞くことで、ひらめきや気づきがあり、語彙や思考が広がることを期待している。鑑賞に必要な表現技法などの基礎的な事項については、知識として与えるだけではなく、実際に文章を書かせ、気付いたことを鑑賞に生かせるようにした。また、インターネット上に掲載されている短歌の選評や他の生徒が書いた文章を全体で確認し、生徒自身が表現や言葉を取捨選択しながら自分の批評文に生かせるようにした。

3.3. 学習過程

学習計画（全8時間）

第1次

第1時 表現技法の確認をし、表現技法を用いた文章の書き換えを行う

第2時 グループで作文を読み合い、表現技法の効果や工夫について考える

第2次

第1時 教材『短歌』を読み、短歌は言葉の選択を経て作られたものであることを理解する

第2時 短歌の鑑賞の視点を知り、グループで正岡子規の短歌（くれなゐの…）の鑑賞をする

子規の短歌のよさを批評文として文章にまとめる

第3時 前時に書いた生徒の批評文を互いに読み合う

短歌の選評の例を参考にし、短歌の批評の仕方を知る

「短歌十五首」の中から心ひかれる短歌をグループごとに選ぶ

第4時 選んだ短歌について、表現されていることやよさを考える

第5時 短歌の批評文を書く

第6時 グループごとに自分たちが選んだ短歌のよさを紹介する

4. 考察

4.1. 表現技法の効果について考える

第1次では短歌に用いられている表現技法に着目させるため、実際に自分で表現技法を使った文章を書く活動を行った。予め用意された文章を、表現技法を用いて書き直す活動である。心情を述べる部分や、緊迫の場面などに現技法を用いている生徒が多く、場面の中でも特に重要な部分に使うことが意識されていた。互いの文章はグループで読み合い、工夫を見つけてワークシートにコメントを記入した。コメントからは、表現技法を用いることで緊張感やうれしさ、悔しさなどの気持ちが強調されていることが読み取れている。いずれの立場からも、表現技法に着目することで心情が読み取れることが分かったようである。実際の短歌の鑑賞では、どのグループも表現技法が用いられている箇所につれ、言葉の意味を考えていく様子が見られた。漠然とすべての言葉の意味について考えていくよりも、着目すべき箇所が分かる方がより焦点化して内容に迫っていくことができたようである。

4.2. 言葉の意味を広げる

第2次では、教材『短歌』（学校図書）にある俵万智の『この味がいいね』と君が言ったから七月六日はサラダ記念日』という短歌を扱い、言葉の意味を広げるグループ活動を行った。この短歌は、唐揚げを褒められた出来事に基づいて作られており、褒められた日も7月6日ではなかったのだが、推敲を重ねるうちに、広く知られる歌の形になったものである。ここには作者の言葉に対する強い思いがあり、そこに気付かせることで、1つ1つの言葉に着目して考えることの大切さが分かるのではないかと考えた。実際の授業では、当初の短歌と完成した短歌を比較し、「サラダ」「7月6日」という言葉を取り上げて、なぜ表現を変える必要があったのかを考えさせた。図1は、グループで考えた際のホワイトボードである。初めは、提示された言葉から直接連想されるものが挙げられていたが、次第にサラダの持つイメージに考えが広がっていった。思いつくままに書き出していったため、役に立つもの、立たないものが混ざっているが、まずはできるだ

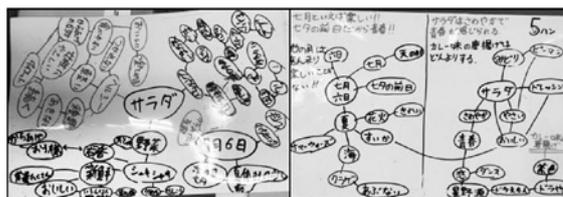


図1. マッピングによる言葉の意味の広がり

けた皆さんの意味を出し、そこから鑑賞に必要な意味を取捨選択するようにした。最終的には、サラダの持つさわやかなイメージが作者の思いに重なるという意見が多くグループから出された。「7月6日」についてはなかなか必然性のある意見が出なかったが、七夕に重ねた場合と重ねない場合を比較し検討していくことで、特別ではない日が作者にとっての記念日としてふさわしいと、新たな考えに気付くグループも出てきた。また、言葉の響きに考えをいたらせる生徒もあり、1つ1つの言葉に思いが込められていることに感嘆の声もあった。このように、1つの言葉を突き詰めて考える姿勢が、言葉の意味を豊かに捉えることにつながっていくと考えられる。

4.3. 言葉の意味を広げて短歌の解釈に生かす

『短歌十五首』では、実際に自分たちで短歌の鑑賞を行った。

まず、初めに鑑賞の仕方を確認するため、全体で正岡子規の短歌（「くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる」）を鑑賞した。図2は話し合いの内容を記入したホワイトボードである。このグループは、「針」と「やはらか」という言葉のイメージの矛盾に疑問を持ちその意味を考えている。固いイメージのある針に対して反対のイメージを重ねることでその固さがなくなると考え、全体としてしなやかなイメージになったことを捉えている。「くれなゐ」という言葉については、辞書で意味を調べているグルー

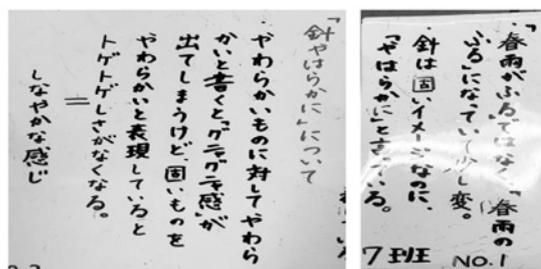


図2. 疑問点について検討した意見

ブが多かった。『国語辞典』(第十版)によれば、「くれない」の意味は「あざやかな赤い色」とある。この意味を知ること、ただ単に赤い色を表していると思われた言葉が、春雨の中で鮮やかに見える新芽の美しさ、生命力を表すことに気付くきっかけとなった。「春雨のふる」の「の」がなぜ「が」ではないのかと考えたグループは、「の」の多用が薔薇のとげにクローズアップさせる効果があるという意見に行きついた。言葉の意味を1つ1つ確認するグループや、言葉の持つイメージから歌全体が醸し出す雰囲気をつかえたグループなど自分たちなりのやり方で鑑賞を行った。他者と意見を練り合うことで、自分ではまともな考えが明確になったり、疑問を基に意見を発展したりすることができると言える。

4.4. 練りあった意見を個に返す

鑑賞を行った後は、理解したことを自分でまとめ直す活動を行った。図3は佐佐木幸綱

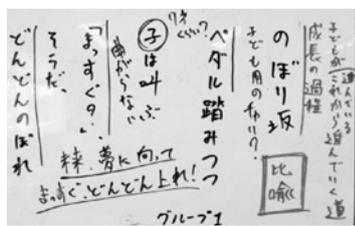


図3. グループによる短歌の言葉の検討

の「のぼり坂のペダル踏みつつ子は叫ぶ『まっすぐ?』、そうだ、どんだんのぼれ」という短歌について話し合った内容である。表現の工夫として比喩や会話部分に着目し、その言葉が表す意味を考えている。「のぼり坂」を人生の中で子どもが進んで行く道と捉え、親の言葉は単なる道

案内ではなく、励ましの言葉であると考えている。この話し合いを基に短歌のよさを個人でまとめた文章が図4である。グループ活動で友達に質問を重ねていた生徒も、話し合う中で出た意見を参考に自分の言葉としてまとめることができている。自分だけでは気付かなかったことも、話し合いを通して考えを広げることができ、自信を持ってまとめることができたようである。また、まとめ方の型を示したことで、より表現に着目した読みとなった。批評文の形をとったことも、表現の効果を客観的に捉えることにつながったのではないかと考えている。

5. 成果と課題

今回の実践では、対話による活動を中心に行なった。自分たちで答えを見つける活動は楽しく、想像が自由に膨らんだようである。これまで、作文を苦手としていた生徒も、グループでの話し合いを基に自分の考えをしっかりと持ち、自分の表現に活かして書くことができた。言葉にこだわり考えや表現を広げるといった点では、どのグループも目的に迫ったと考えられる。短歌の後に行なった教材『走れメロス』の授業でも、他者の質問に答える中で自分の考えをまとめて答えようとする姿が見られている。

一方で、これを個人の力として獲得させるためには、繰り返し似たような活動を取り入れる必要もあると考えている。他者との対話ではなく、個人の中での対話、作品との対話を行う中で、自分の考えをまとめていくことにつなげていきたい。

文献

阿部昇 (2016) 確かな「学力」を育てる アクティブ・ラーニングを生かした探究型の授業づくり—主体・協働・対話で深い学びを実現する—。明治図書出版 .159pp.

藤村宣之・橘春菜・名古屋大学教育学部附属中・高等学校(編著) (2018) 協同的探究学習で育む「分かる学力」—豊かな学びと育ちを支えるために—。ミネルヴァ書房 230pp.

松村明他編 (2005) 国語辞典 第十版。旺文社
文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説国語編

俵万智 (1993) 短歌をよむ。岩波書店 .244pp.

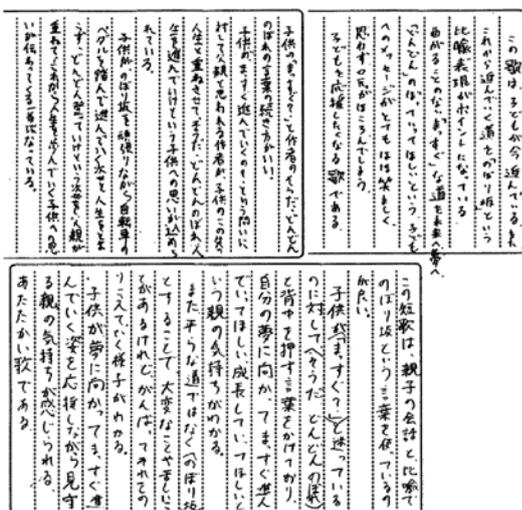


図4. あるグループの生徒の批評文 (3人班)